



TITLE:

## 第1章 昭和56年度京都大学構内遺跡調査の概要

AUTHOR(S):

樋口, 隆康; 川上, 貢; 五十川, 伸矢

---

CITATION:

樋口, 隆康 ...[et al]. 第1章 昭和56年度京都大学構内遺跡調査の概要. 京都大学構内遺跡調査研究年報 1983, 1981: 1-4

ISSUE DATE:

1983-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/227331>

RIGHT:

# 第Ⅰ部 京都大学構内遺跡発掘調査報告

## 第1章 昭和56年度京都大学構内遺跡調査の概要

樋口 隆康 川上 貢 五十川 伸矢

### 1 調査の概要

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営その他掘削工事にあたって、既知の遺跡との関係や過去の調査結果を勘案し、当該地に存在する埋蔵文化財の調査を、試掘、発掘、立合にわたっておこなっている。

昭和56年度には、以下の28件の調査を実施した。

試掘調査	農学部附属亜熱帯植物実験所実習宿泊施設新営予定地(和歌山県串本町)	(第1章)
	農学部熱帯農学科校舎新営予定地(北部構内B E 33区)	(第6章, 図版1-103)
	農学部附属農業研究施設増築予定地(北部構内B G 35区)	(第6章, 図版1-104)
	北部構内実験排水槽設置予定地(北部構内B D 30区)	(第4章, 図版1-105)
	放射性同位元素総合センター増築予定地(医学部構内A N 20区)	(第6章, 図版1-106)
	放射線生物研究センター新営予定地(医学部構内A N 20区)	(第6章, 図版1-107)
	医学部附属病院産科病棟ドライエリア増設予定地(病院構内A K 17区)	(第6章, 図版1-108)
発掘調査	北部構内実験排水槽設置予定地(北部構内B D 30区)	(第4章, 図版1-109)
	理学部附属瀬戸臨海実験所研究棟新営予定地(和歌山県白浜町)	(整理中)
	工学部電気系学科校舎附属施設設置予定地(本部構内A X 28区)	(第2章, 図版1-110)
	教養部構内吉田食堂建設予定地(教養部構内A P 22区)	(発掘中, 図版1-111)
立合調査	農学部附属植物生殖質研究施設給排水管理設工事(京都府向日市)	(第1章)
	医用高分子研究センター校舎新営予定地(病院西構内A G 12区)	(表4, 図版1-112)
	原子エネルギー研究所施設新営工事(京都府宇治市)	(表4)
	農学部附属農業研究施設アース設置工事(北部構内B G 36区)	(表4, 図版1-113)
	理学部附属瀬戸臨海実験所実験水槽新営工事(和歌山県白浜町)	(第1章)
	京都市舗道拡張工事(本部構内A T 21区)	(第6章, 図版1-114)
	電気管理設工事(教養部構内)	(表4, 図版1-115)
	附属図書館新営工事(本部構内A U 21区)	(表4, 図版1-116)
	農学部附属農業研究施設増築工事(北部構内B G 35区)	(第6章, 図版1-117)
	文学部身障者学生用エレベーター設置工事(本部構内A X 26区)	(第6章, 図版1-118)
	構内基幹整備給水管理設工事(医学部・病院構内)	(表4, 図版1-119)
	構内実験排水管理設工事(教養部・医学部構内)	(表4, 図版1-120)
	構内ヘリウムガス回収管理設工事(本部構内)	(表4, 図版1-121)

分布調査	農学部附属演習林上賀茂試験地(京都市北区上賀茂本山)	(第1章)
資料整理	工学部電気系学科校舎新営予定地(本部構内A X28区)	(第2章, 図版1-90)
	農学部附属牧場施設新営予定地(京都府丹波町)	(第5章)
	教養部構内実験排水槽設置予定地(教養部構内A O21区)	(第3章, 図版1-91)

なお、農学部附属亜熱帯植物実験所実習宿泊施設新営予定地の試掘調査は、周知の遺跡である大森山C地点遺跡〔文化庁文化財保護部編 76 p.44〕に近接するため実施したものであるが、予定地内には遺跡が存在しないことを確認できた。この調査にあたっては、亜熱帯植物実験所の職員の協力を得た。

工学部電気系学科校舎附属施設設置予定地の発掘調査は、昭和55年度調査区の西北にオイルタンク付設のため実施したもので、昭和55年度に検出した土器溜の西半部分を完掘し、大量の一括遺物を得た。この成果については、第2章を参照されたい。

農学部附属演習林上賀茂試験地の分布調査は、当センターの本年度の研究活動の一環として実施したもので、同志社大学講師鈴木重治氏の協力を得た。調査の結果、本山窯の緑釉陶器・須恵器生産の研究のための基礎資料を採集することができた。

## 2 調査の成果

昭和56年度の調査によって、いくつかの新しい知見を得た。その詳細は第2章以下で述べることとし、本節では、それらを整理して本年度の成果の要点を略述する。

**吉田キャンパスの遺跡** これまでの調査によって、鴨東の一角を占める吉田キャンパス内の各時代の遺跡は、その立地や周辺の地形あるいは文献などから、いくつかのまとまりを想定することができる〔京大埋文研81 b pp. 5-12〕。このうち、縄文・弥生時代の遺跡は、旧白川の形成した扇状地上の微高地と、その南または西の下底部に位置している。扇中央部にあたる北部構内B E33区の試掘調査では、縄文晩期の土器が出土し、この周辺に遺跡群の中心があったことを確認した(第6章)。また、北部構内B D30区では、弥生前期末から中期初頭の短期間に厚く堆積し、それ以降の遺跡形成に大きな影響を与えた黄砂層の下に、土石流の痕跡を検出したことも重要である(第4章)。B D30区周辺は、黄砂層が特に厚く、弥生前期以前の河川が存在が推定されており〔泉78 pp.43-48〕、北部構内一帯の地形復原のための好資料を提示したといえよう。

本年度の調査では、弥生土器はB D30区で出土し(第4章)、本部構内A X28区では、弥生中期とみられる銅鏃、磨製石鏃を発見した(第2章)。しかし、良好な遺構や包含層を確認することはできなかった。中期以降の弥生時代の遺跡は、吉田キャンパス南方の左京区岡崎周辺で、かなり確認されており、本年報では、そのひとつである岡崎南御所町採集の

土器について研究をおこなった(第Ⅱ部第2章)。

前述の北部構内BD30区の調査では、10～11世紀の土師器・黒色土器・緑釉陶器を含む比較的良好な遺構や包含層を検出し、平安前・中期の軒瓦も出土した(第4章)。BD30区の位置する北部構内南半域は、平安前・中期の遺物の出土量のめだつ地域であり、天台座主良源が舍利会を催した吉田寺の寺域とする推定〔岡田80 pp. 61-67〕が、より確実になったといえよう。

次に、教養部構内AO21区の発掘調査は、教養部西半域では、はじめてのものであり、13～14世紀の井戸、土墳墓、土器溜などを検出し、多くの一括遺物を得た(第3章)。京都大学吉田キャンパス出土資料を中心とした、古代・中世の土器編年の大綱は『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』に示したが、AO21区の調査で得たSE6・SE3出土遺物は、本部構内AX28区のSK51出土遺物(第2章)などとともに、これを補完充実させる良好な資料といえよう。なお、現在AO21区の東に隣接するAP22区で発掘調査をすすめており、大量の古代・中世の遺構、遺物を発見している。これらを総合し、吉田山西南麓一帯の遺跡の実態が明らかにしうると考える。

本部構内AX28区では、西に隣接するAW28区の調査と同様に、近世白川道、溝、柵、野壺などを検出し、18世紀から19世紀にいたる白川道沿道の景観変遷をあとづける資料を得た(第2章)。近世の道路遺構は、昭和55年度に本部構内AT27区で調査しており〔五十川81 pp. 21-34〕、本年度も立合調査によって、それらの延長部分を確認している(第6章)。第Ⅱ部第1章では、これらの成果をもとに、文献や近世絵図を参考にしつつ、吉田社周辺の近世の景観復原をおこなっている。この近世の道路は、それ以前の吉田周辺を知るうえでも重要であり、中世後半の勸修寺家の菩提寺浄蓮華院の動向や吉田構成立の過程解明のための資料と考えられる。

**吉田キャンパス外の附属施設の遺跡** 京都府船井郡丹波町蒲生野所在の美月遺跡の発掘調査では、弥生中期の溝のほか12世紀ごろの掘立柱建物、土坑などを検出し、弥生土器・石器、中世の土師器・瓦器が出土した(第5章)。由良川水系上流に位置する弥生時代の遺跡としては、はじめての調査例であり、丹波地方の弥生土器あるいは瓦器の地域性を考察するための資料を得たことは特筆にあたいする。

また、和歌山県西牟婁郡白浜町瀬戸臨海所在の瀬戸遺跡の発掘調査では、縄文晩期の甕と弥生前期の壺が共伴する土坑を検出し、古墳時代・古代の製塩土器が大量に出土した。これらは、現在整理中であり、その詳細については報告書で明らかにする予定である。そ

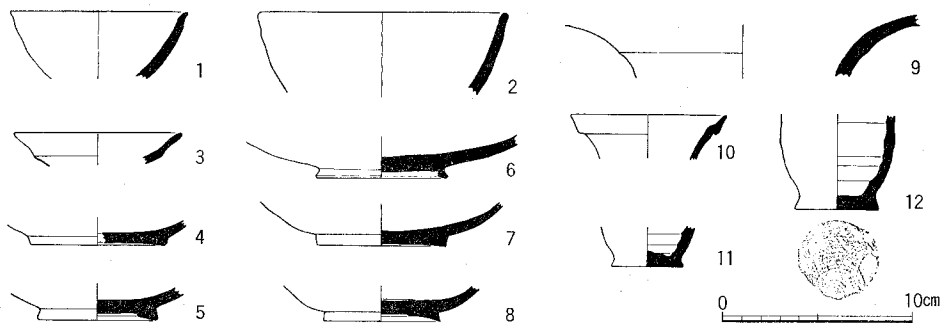


図1 本山窯採集の緑釉陶器(1～5・9), 灰釉陶器(6), 須恵器(7・8・10～12)

のほか、実験水槽新営工事の立合調査では、縄文後期の宮滝式土器を採集した。

本山窯跡は、京都市北郊岩倉盆地に所在する、平安前・中期ごろの緑釉陶器を生産した遺跡である〔宇佐56 pp. 30-33〕。今回の分布調査の結果、農学部附属演習林上賀茂試験地東方の畑地に遺物の集中する地点を確認し、多数の緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器を採集した(図1)。採集した緑釉陶器は36片。器種には碗・皿・壺があり、底部には平底・蛇の目高台・削り輪高台のものが各1点ずつある。採集した須恵器は156片で碗・皿・壺がある。碗・皿の89片のうち、平底は10片、蛇の目高台3片、削り輪高台5片、付け高台3片と、平底のものが多くことが注目される。また、水瓶が28片あり、碗・皿に次いで多い。また、周辺で、縄文土器や中世の遺物なども採集しており、当地に多様な遺跡が存在することも確実となった。

京都府向日市物集女に所在する農学部附属植物生殖質研究施設の立合調査では、打製石器や須恵器のほか、中世後半の遺物を採集した。この一帯は、中海道遺跡として、これまでに、弥生後期から古墳時代の遺構・遺物が発見されている〔高橋ほか79 pp. 51-71〕。また、研究施設の東側の畑地には、土塁と濠が現存し、「御所街道」、「中海道」など垣内を意味する字名が存在するため、中世後半の城館が存在した可能性が高い〔木下71 pp. 179-181〕。

以上のように、吉田キャンパス外の附属施設においても、多くの遺跡を調査し、あるいは新たに遺跡を確認した。今後、これらの遺跡に対しても、その実態解明のための調査研究をおこない、保存の策を講ずる計画である。